

かんのん劇場ファンの皆さま

「一流の技を身近で楽しもう」と1999年に旗揚げしたこのかんのん劇場もおかげさまで昨秋15回目を開く事が出来ました。今年はいろいろな事情でお休みしようかと考えていたのですが、「今度はなにをやるのですか？楽しみにしていますよ」といったお声を少なからずいただきまして、「これはなんとしてもやらねばなるまい」と開催を急遽決めました。今回は原点に立ち返って、第1回の出演者でもある語りの名手、古屋和子さんに出演をお願いしました。急なことだったのですが古屋さんがご自身の予定を調整して快諾していただきました。第3回『山月記』、第6回『夜叉ヶ池』に続いて4回目の出演です。

古屋さんは内外を東奔西走のご活躍ですが、毎年1月には原宿で必ず定例の語りの会を開き、研鑽を積んでおられます。そんな真摯な姿勢に共感する熱心なファンも少なくありません。今回はかつて稲城にも住んで居られた人気作家、浅田次郎さんの作品を取り上げます。一切のBGMも舞台装置もないのに、古屋さんの円熟した語り口で、私たちの目の前にももの見事に展開する浅田ワールド。秋の夜長のひととき、ぜひ味わっていただきたくご案内申し上げます。

かんのん劇場支配人兼普門庵住職

見城 宗忠



古屋和子（ふるやかずこ）プロフィール

早稲田小劇場を経て、1978年水上勉主宰「越前竹人形の会」で語りを務めたのをきっかけに語りに取り組む。その後、1990までは横浜ボートシアターに所属しつつ、観世榮夫演出の「近松門左衛門の世話浄瑠璃を絃に乗せずに語る試みシリーズ」をはじめ、豊竹咲大夫と「高野聖」を共演など。2002年からライフ・ワークとして、故観世榮夫演出による「音の臨書—近松門左衛門世話浄瑠璃集」（近松の世話浄瑠璃を音と呼吸にこだわって読み直す試み）に取り組む。

1991年から北米各地の大学でワークショップを行なうと共に、ストーリーテリング・フェスティバルに出演。また、先住民居留地に滞在、語りを交換。2000年から始まった豊田文化振興財団主催のインターナショナル・ストーリーテリング・フェスティバルのアート・ディレクター。《伝統・実験・異文化・自然を四本立てとするパフォーマンス&ワークショップの場》として『明空風堂』を主宰。NHK芸術劇場「古屋和子語りの世界」（1998）自作として、2007年から10年にかけて行なわれる「法然上人800年大遠忌」の浄土宗西山禅林寺派の法要で「法然上人物語」。また渡来文化ネットワークで「桓々たり武王—長岡京」（2007）、一枝の草一把の土を持ちて—聖武天皇・恭仁京」（2008）。説経・平家・近松等の古典、鏡花・中島敦等の近代古典から童話まで幅広いレパートリーを持つ。